



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3673 号 2017.5.26 発行

<仙台中 2 自殺>再調査を正式表明

河北新報 2017 年 5 月 25 日

仙台市南中山中 2 年の男子生徒＝当時（14）＝が昨年 2 月に自殺した問題で、奥山恵美子市長は 24 日の定例記者会見で、いじめ防止対策推進法に基づく再調査の実施を正式に表明した。

市教委の第三者委員会「いじめ問題専門委員会」は今年 3 月、「いじめによる精神的苦痛が自殺の一因」と市教委に答申。市教委から報告を受けた奥山市長が再調査の可否を検討していた。

奥山市長は専門委の調査を「国の指針に沿った適切な内容」と評価した一方、「いじめの実態や学校の対応について、ご遺族の認識と答申との間に隔たりがある」ことを再調査の理由に挙げた。専門委とは別の構成の委員会を設けて再調査する。

男子生徒の父親は「決定は遅すぎたが、ほっとした。久しぶりに息子にいい報告ができる。なぜ息子が追い詰められたのか真相が知りたい。今度こそ真実を明らかにしてほしい」と話した。

河北新報特集 いじめ 君たちへのメッセージ

<ひとりじゃないよ>「自信」育み生きる力に

河北新報 2017 年 5 月 3 日

◎いじめ 君たちへのメッセージ（1）／シンガー・ソングライターさとう宗幸さん（68）



テレビドラマで教師役を演じたり保護司をしたりしているので、いじめの問題には胸が痛くなります。いじめを苦しめた痛ましい出来事が起きる度に、自治体の教育委員会と現場の教師、子どもたちの間に、どうしてこんなにも温度差があるのだろうかといぶかってしまいます。

それぞれが理解し合い、信頼関係があれば、未然に防げた問題も少なくない。特に子どもが SOS を発しているのに、大人が子どもの立場に立って適切な対応をしていなかったケースが目立ちます。事なかれ主義と無責任さに憤りを感じます。

いじめられている子どもに対しては「決してひとりじゃないんだ。必ず助けてくれる人がいる」というメッセージを伝えたいです。孤独感や絶望感にさいなまれて自らを追い込む前に、信頼できると思う人に相談してほしい。

「人は誰でも輝ける」というのが私の持論です。勉強やスポーツ、文化活動など、何でも構わないので自分が自信を持って取り組めるものを見つけてほしい。得意なものがあれば、それが自分を救ってくれ、生きる力につながるはずです。

◇

仙台市立中（青葉区）2 年の男子生徒（13）が自ら命を絶った。中高生の自殺は 2014 年以降、仙台市をはじめ東北各地で相次ぐ。いじめなどで今悩む君たちへ。寄せられたメッセージに耳を傾けてほしい。

<ひとりじゃないよ>傷つけるのは弱い人間

河北新報 2017 年 5 月 4 日

◎いじめ 君たちへのメッセージ（２）／プロレスラー里村明衣子さん（３７）



仙台市の女子プロレス団体「センダイガールズプロレスリング」の代表をしています。プロレスは相手の技を全力で受け止め、それ以上の力で返していくスポーツ。互いの信頼があつてこそ、観客に感動を届けることができます。無抵抗の人の心や体を傷つけるのは、痛みを知らない弱い人間がすることです。

私自身も悩んだことがあります。１５歳でデビューして強くなるにつれ、弱い先輩が優位に立とうと言葉で傷つけてきました。ストレスを感じて逃げだそうとも思いましたが、周囲の方に相談することで乗り越えることができました。話す勇氣さえあれば、誰かが必ず助けてくれます。

若い子たちは自分を守るすべを知らず、何げない一言に傷ついてしまいます。家庭環境によるストレスを、学校で暴言を吐くことで発散する子もいるでしょう。あいさつしても目を合わせないなど、小さなことの積み重ねがいじめにつながります。

相手を尊重する心を育むのは大人の責任。私も代表として、若い選手の指導に当たっています。親が子にストレスを与える環境をつくらないことが、まず前提ではないでしょうか。

<ひとりじゃないよ>誰かに助け求め続けて 河北新報 2017年5月5日

◎いじめ 君たちへのメッセージ（３）／弁護士（仙台市）鎌田健司さん（４７）



子どもを巡る多くの問題に関わってきた弁護士として、３人の子どもの父親として、いじめや自死が起きると誰かに相談できなかつたか、周囲が気付くきっかけがなかつたのかと、いつも考えてしまいます。

私も小中学生の頃は悩みがたくさんありました。今振り返ると、そこまで悩む必要もなかつたなと思いますが、当時は大きな悩みに思えましたし、誰にも相談できませんでした。悩みは１人で抱え込むと、実際以上に重く、大きくなってしまいます。

親の考えや気持ちを押し量って発言したり、行動したりする人も多いと思います。弁護士として皆さんと接しても、本心に近づくのが難しいと思うことも、よくあります。

学校と親がうまく連携できないこともあります。皆さんを置き去りにしようとしているわけではありません。何が最善かを一生懸命に考えてはいるのです。

いじめは相談してもすぐに解決するものばかりではないですが、誰かに助けを求め続けてほしい。一緒に考えてくれる人、応えてくれる人は必ずいます。私たち大人もアンテナを高くして、皆さんのサインを見逃さないようにします。

<ひとりじゃないよ>共に考える大人探して 河北新報 2017年5月6日



◎いじめ 君たちへのメッセージ（４）／NPO法人東日本カウンセリングセンター理事 五十嵐豊子さん（７２）

人が集まる所で、争いやけんかが起きてしまうのは避けられません。いじめは大人の職場にもあります。

いじめられている君は、悩みを一人で抱えない方法を考えよう。そして、いじている君も実は内心で「いつ自分がいじめられるか」と、おびえながら生活しているかもしれないね。私たち大人は、そんな君たちの苦悩を聞き出す工夫や努力をしないとイケない。

いじめられている君は今、心がとても敏感なはず。感受性が高まったのなら、そのアンテナで君の悩みを一緒に考えてくれる大人を探し出してください。困った時に他人の力を借りるのは、恥ずかしいことじゃないよ。

君たちのことを真剣に考えてくれる大人は、親や先生など身近な人ではないかもしれない。でも、今はインターネットで世界中の人と知り合える時代。君たちなら、一緒に知恵

を絞ってくれる大人を必ず見つけ出せるはずです。どうか結論を急がず、物事をよく考える習慣を身に付けてください。

いじめられている君。いじている君。君たちが君たちらしく成長し、いじめを乗り越える方法がきっと見つかると思います。

<ひとりじゃないよ>命ある限り光は見える 河北新報 2017年5月8日

◎いじめ 君たちへのメッセージ(5) プロ野球東北楽天内野手今江年晶さん(33)



中学生といえば、人生はこれから。子どもから大人に近づいていく時期です。そこで自殺して命を亡くすのはすごく残念で、あってはならないことです。

私は社会活動で、群馬県の身体障害者野球チームや、さまざまな境遇の人と交流しています。こうした方々も大変なことがありながら、結婚をして家庭を築いたり、一生懸命に楽しく生活したりしています。

命がある限り、絶対に光は見えてくると思います。どんな状況であっても、命を絶ってしまったら全てが終わってしまいます。追い込まれていると思いますが、一人で抱え込まないでください。両親や一番仲良しの友達と会話をするだけでも、気持ちは変わってくると思います。

スポーツ観戦もいいと思います。スタンドに行ってみると目の前で行われている試合を見て、一緒に盛り上がるすることができます。

みんなが試合に集中しているスタンドにいと、周りから見られているという気持ちなくなり、楽になれます。私も職業柄、「周りから見られている」という意識は強いですが、スポーツ観戦に行くと周りの目を忘れることができ、みんなと楽しむことができます。

<ひとりじゃないよ>面白いこと考えようか 河北新報 2017年5月9日

◎いじめ 君たちへのメッセージ(6) / お笑いコンビサンドウィッチマン 富沢たけしさん(43) 伊達みきおさん(42)



今、君はどんな環境でどんな毎日を送っていますか。「あの人に会いたくないから学校に行きたくないな」とか思っていないですか。



実は、過去を振り返れば誰にでもあることなんです。嫌な人や会いたくない人はいるものです。でも、一生一緒にいるわけじゃない。卒業すれば別々になり、ほとんど会わなくなる。自分が楽になるように物事を考えるといいんだよ。

「いじめ」をするようなやつは将来、必ず返り討ちに遭います。そして苦しむはず。もし、自分が「いじめられている」と感じたら、その人に聞いてみる。「これ、いじめ？」って。その人自身は「いじめ」と認識していない恐れがあるから。そんなパターンを学生の頃に見ました。確認するのが一番いいと思います。

決して、この世からいなくなるなんて考えちゃ駄目だよ。この先の人生、楽しいことが絶対にいっぱいあるから。山ほどあるから。

あとね、面白いことを考えるといいよ。いろんな芸人のDVDを見てネタを考えてみたり、心から笑ったり。気分が楽になるから。

落ち込んだときにも、笑ってもらえるよう俺たちも全力で頑張る。将来は明るいはずだから。乗り越えようぜ!

<ひとりじゃないよ>親の無償の愛を感じて 河北新報 2017年5月10日

◎元中学校教諭、小さな命の意味を考える会代表佐藤敏郎さん(53)

なぜ誕生日は「めでたい」のか、考えたことがありますか。

東日本大震災で、石巻市大川小に通っていた次女のみずほ＝当時(12)＝が犠牲にな

りました。震災前、誕生日は1年間を生き延びたことを祝うものだと思っていましたが、今でもやっぱりみずほの誕生日はめでたいんです。みずほが私たちの子どもになった、地球に一つしかない「おめでとう」の日は、何年たっても変わりません。



あなたがあなたで居るだけで支えられ、救われる人がいます。わが子が生まれたばかりの時は、笑顔を見せたり手を開いたりするだけで本当にうれしかった。親から子への無償の愛は成長しても変わらないんです。自分のおなかを痛めて産み、毎日おしめを替えていた子が理不尽な命の落とし方をしたら、親は自分の一部を失ったような感覚に陥るでしょう。

本当に死にたい人なんてきっといないはず。「死んだ方がまし」と思うまで追い込まれてしまう子どもがいるのは、大人たちに問題があります。学校や家庭、さまざまな大人が交わり、子どもを支えるセーフティーネットを構築することが重要だと思います。

<ひとりじゃないよ>支える大人は必ずいる

河北新報 2017年5月11日

◎NPO法人全国いじめ被害者の会理事長 大沢秀明さん(73)



中学3年だった四男＝当時(15)＝がいじめを受けて自殺して21年が過ぎました。長い時がたちますが、いじめはなくなりませんでした。いじめをなくすために必要なのは「悪いことは悪い」と加害生徒たちに分からせることです。

学校教育法35条の規定で、素行不良の生徒を出席停止処分にできます。ある意味で処罰ですが、更生のための措置でもあります。加害生徒をしっかりと教育し、いじめをしないよう更生に導けば、いじめはこの

世からなくなるはずです。

教育委員会や学校はそもそも、いじめを「なかったこと」にしがちです。なかったことにすれば面倒な措置をせずに済むからです。

自殺した仙台市青葉区の市立中2年の男子生徒(13)は「臭い」などと言われ、学校に相談していました。その時に学校がきちんと調べていれば助かった命です。自殺は学校がきちんとした調査を放置した結果です。

小中学校は義務教育のため、簡単に「逃げろ」とは言えませんが、悪いのはいじめる生徒と、いじめを野放しにしてきた教師です。いじめに苦しむ子どもたちを支える大人は全国にたくさんいます。どうか死なないでほしい。

<ひとりじゃないよ>逃げることを恐れないで

河北新報 2017年5月13日

◎いじめ 君たちへのメッセージ(9) 全国自死遺族連絡会代表理事 田中幸子さん(68)



いじめで追い詰められている子どもたちに伝えたい。休学でも転校でもいい。今いる場所以外のどこかへ逃げることを恐れないでほしい。手を差し伸べてくれる大人は必ずいます。

誰かをいじめた経験がある人は、今すぐ自分のしたことを後悔してほしい。そして「いじめはだめだ」と率先して周りに言える人になってほしい。

仙台市内だけで2年7カ月の間に3人もの中学生がいじめを背景に自ら命を絶ってしまいました。本当にいたたまれない思いです。

気になるのは、学校が痛ましい自死のたびに「残された生徒の心のケアを進める」と強調することです。いじめ問題の解決から目を背けているようにしか思えません。

学校現場は生徒の自死を「特殊なケース」と捉えていないでしょうか。学校でいじめがあっても生徒が自死することなどない。自死は特殊なケースだと。そんな認識で悲劇の連鎖は食い止められません。

全ての教育関係者に聞きたい。本当に困っている子どもと、心から向き合っていますか。

教育者としてのプライドを捨て、初心に戻ってゼロからいじめの問題に向き合ってほしい。

<ひとりじゃないよ>勇気持ち変化へ一歩を

河北新報 2017年5月14日

◎いじめ 君たちへのメッセージ(10) サッカーJ1仙台監督 渡辺晋さん(43)



いじめは深刻な問題です。しかしそれを全てなくすことはとても困難なことでしょう。もし、つらい状況に陥ってしまったら、自分自身を変える、環境を変えることも一つの方法です。それには大きなエネルギーが必要になる。でも勇気を持って変化を恐れずに、一歩を踏み出すことが大切です。

仲間だと思っていた人からいじめを受けたとする。そこにしがみつこうともがき苦しむより、そこから飛び出し、何かを「変える」ことの方がポジティブなエネルギーが生まれるはず。それは決して「逃げる」こととは違うから。

選手時代、けがで苦しんだことがあります。プレーできずにつらい時、あえて多くの人と出会い、話す機会をつくりました。リハビリに没頭するだけでなく、違う世界を知ること、人間としての幅が広がっていくのを感じました。今ではそれが大きな財産です。

誰かをいじめることにエネルギーを注ぐことは、本当に無駄なこと。本気になれるものを見つけてほしい。そして、それを仲間と共有できたら。こんなに素晴らしいことはないはず。

<ひとりじゃないよ>人生には無数の可能性

河北新報 2017年5月15日

◎いじめ 君たちへのメッセージ(11) せんだいこども食堂 門間 尚子さん(48)



講演で各地の学校を訪ねるのですが、自死やいじめに関する相談が最近増えています。そのたびに「あなたは一人じゃない」と強く呼び掛けています。

「自分なんて生きている価値がない」「生きてちゃいけない」と思い悩み、つら過ぎて「助けて」と言葉にできないときもあるでしょう。でも、どうか生きることを諦めないでほしい。「あなたは多くの人に愛され、見守られ、誰も代われない素晴らしい存在なのだ」と大声で言いたい。

「あなたを理解したい、一緒に考えたい、一人にはしない、させたくない」と思う人が周囲には数多くいることを知ってほしい。いじめられていい人、傷つけられて当然の人なんて、この世にはいません。

「これまでより、これからの人生の方がずっと長いんだよ」と伝えたい。無数の可能性と、多くの出会い、友達になるたくさんの方が待っているはずなんです。どうか、未来の自分のために生きて。

大人の人たちにもお願いしたい。子どもたちに声を掛けて。特別な資格や技術は必要ありません。黙ってそばにいてあげるだけでもいい。どうか子どもたちの手を離さないでください。

<ひとりじゃないよ>悩みや苦しみを聞かせて

河北新報 2017年5月16日

◎いじめ 君たちへのメッセージ(12) NPO法人学校の底力副理事長 宮崎良徳さん(50)



思春期は良くも悪くもいろんな現実が見えてきて、「生きていてもつまらない」と悩み始める子がいます。世の中や周りを見渡すと幸福感に満たされた大人が少なすぎる。だから「あんな大人になりたい」と思っているのかもしれない。

「いじめによる自殺を無くしたい」。この思いで一致した大人たちが、宝物である子どもを社会全体で守ろうと昨年3月に「学校の底力」をつくり、仙台市を中心に活動しています。

意地悪が高じるといじめになります。いじめは被害者も加害者もずっと心の傷として残るので、子どもたちに意地悪といじめの線引きをきちんと教えていけるようなプログラムの開発を進めています。

先生も親も余裕がなくて、子どもが話し掛けにくい状況になる悪循環に陥っています。何に苦しんでいて、何に悩んでいるのか聞いてあげたい。

いじめられている子どもの「大丈夫」という言葉は、「この人に話しても変わらない」と諦めたサイン。大人はそこを自覚してほしい。話をきちんと聞いてくれる相手がいれば、死なずに済んだかもしれません。死にたいぐらいつらかったら、学校に行かなくていい。とにかく生きていてほしい。

<ひとりじゃないよ>許さない世論を教室に 河北新報 2017年5月17日
◎いじめ 君たちへのメッセージ (13) 教育評論家・法政大特任教授 尾木直樹さん (70)



プライドを守るために、嫌なことをされても笑顔でいる。先生につらいと訴えたのに、通じなかった。

いじめられ、不当な思いをしている子どもたちに言いたい。あなたの苦しみを分かる人は必ずいるよ。希望を持っていてほしい。

いじめは人権侵害で許されない行為です。あなたに非はない。加害者は不幸です。人を傷つけた経験を生涯背負い、苦しむんですよ。

自殺を「死ぬ勇気があれば生きられた」と言う人がいます。本当はみんな生きたかったの。心神耗弱状態で判断力を失ったのです。

指導力のない教師の責任は大きい。問題がすぐ解決しそうにないなら、学校に行かなくていいんです。緊急避難をして心の居場所をつくりましょう。リアルな世界がきつければ、読書で豊かな世界に触れてください。

いじめを傍観して悩む人は単独で行動せず、3人以上で先生に「つらい」と訴えて。教室に、いじめを許さない世論をつくりましょう。

子どもの主体性を育て、いじめを人権問題と捉える教育を提言しています。児童が対策を進める小学校もあるんですよ。まだ少ないけれど、子どもの力を信じて応援する学校が増えてほしいと思います。

<ひとりじゃないよ>好きなもの大切に 河北新報 2017年5月18日



◎いじめ 君たちへのメッセージ (14 癌) 作家 柳美里さん (48)

私が暮らす福島県南相馬市で2月、中学生が自ら命を絶ちました。東京電力福島第1原発事故に伴う避難で、散り散りになった子どもたちにも「圧」がかかっています。

誰かが死ななければ、いじめが公にならないという現状に憤りを感じます。学校という閉鎖的な世界に大人が開口部をいかにつくるかが問われています。子どもは学校と家、二つの世界が全てだからです。

スクールカウンセラーや電話相談はスマートフォン世代の子どもには敷居が高いです。学校外の相談機関の無料通信アプリLINE (ライン) のアカウントを周知するなど、外の世界とつながる方法を子ども目線でつくる必要があります。

私も小学校時代からいじめられていました。同級生からいじめられる以上に、先生が助けてくれないのがつらかった。私は「バイ菌」と呼ばれていました。

給食当番の際、私が配膳すると「バイ菌が伝染するから食べない」とクラス全員が食事をボイコットし、担任の先生は私を当番から外しました。水泳大会で泳げず、歩いていた私を同級生は「柳おえっ」と嘔吐(おうと)するような掛け声ではやし立てました。先生たちは笑って見ていました。

助けとなったのは本を読むこと。本が好きだったわけではなく、いじめられているときに顔を隠すための手段、盾でした。次第に本の世界に没頭し、文章が好きになり、大切な

逃げ場になりました。今の私に至るきっかけでもあります。

好きだったもの、好きになったものを大切にしてください。本でも音楽でもゲームでもいい。それが閉じられた世界の開口部になるかもしれません。好きな歌手やスポーツ選手に手紙を出してみるのもいいです。少なくとも私は必ず返事を書きます。今、追い詰められているとしても、世界は一つではありません。あなたが生きていける世界は必ずあります。

大学倶楽部・千葉大、敬愛大 いじめ対策授業 千葉・柏市教委と共同開発 全20中学校で実施へ

毎日新聞 2017年5月24日

いじめについて話し合う生徒

千葉県柏市教育委員会が、インターネット上のいじめを第三者の立場から考える新しい授業の導入を決め、5月22日に市立土中学校で公開した。授業内容や教材を市教委などと共同開発した千葉大学、敬愛大学は「ネットいじめを傍観者の視点で扱う教材は全国でも珍しい」としている。



この日はNPO法人「企業教育研究会」（千葉市中央区）のスタッフが、1年生22人を対象に授業を行った。

ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）に悪口を書き込まれ、いじめられる生徒を傍観する別の生徒の視点で作られた約10分のドラマ仕立ての動画を視聴。その後、生徒たちは悪口を止める書き込みをするか、何もしないかを討論。生徒からは「自分もいじめられる可能性がある」「行動しないと何も始まらない」といったさまざまな声が上がリ、行動を起こすことの大切さを学んだ。授業後には、授業を開発した千葉大学教育学部の藤川大祐教授と敬愛大学国際学部の阿部学講師が講評した。

深刻化するネットいじめは教員や保護者の目が届きにくく、子供たち自身が防止する姿勢を持つことが重要という。藤川教授は「実際にいじめを止めるための行動を起こせるかどうかはクラスの雰囲気が大きく左右する」と指摘している。市教委は今後、市内全20中学校の1年生に同様の授業を実施するという。

市教委は現在、市内約1万人の公立中学生を対象に、いじめなどの被害の報告・相談を匿名で受け付けるスマートフォン向けアプリ「STOP i t（ストップイット）」の無償配布も進めている。【橋本利昭】

【論説】交流サイト被害 官民、家庭で子ども守ろう 福井新聞 2017年5月23日

コミュニティーサイトをきっかけに犯罪に巻き込まれた18歳未満の子どもが昨年、最多となる1736人に上った。統計を取り始めた2008年に比べ倍以上の増加だ。スマートフォン（スマホ）の普及が背景にあるが、子どもを守るため、警察庁やサイト運営業者などの官民連携に加え、家庭での一層の取り組みを求めたい。

警察庁のまとめによると、サイトにアクセスした端末はスマホが86・9%を占めた。被害者の大半が女性で、罪種としては、淫行など青少年保護育成条例違反が最多で、児童ポルノ、児童買春など。加害者に会った理由では、援助交際などの金品目的、性的関係目的、交遊目的を挙げた。

被害者が多かったサイトは、ツイッターやLINEといった複数交流系で、面識のない者同士がつながるチャット系は減った。03年の規制法施行以降、出会い系サイトによる被害は減少している。悪質サイトへの接続を制限するフィルタリングについては「利用なし」が9割近くあり、これでは“野放し”状態だ。保護者には子どもが利用できる範囲をフィルタリングで設定するよう努めてもらいたい。学校でのインターネット利用法の学習に関しては、被害者の半数が「覚えていない」としている。教育現場でも啓発に努めているだ

ろうが、やはり、子どもたちの記憶に残る啓発活動が必要だ。

警察庁は、サイト業者などに18歳未満が大人と交流できないよう規制する「ゾーニング」の導入を求めている。また、年度内にも事業者などでつくる協議会を設けるとしている。事業者側も真摯（しんし）に向き合い、対策を取ってほしい。

内閣府が実施した16年度の「青少年のインターネット利用環境実態調査」の概要によると、スマホを持つ割合は、小学生で27%、中学生で51%。高校生は94%とほとんどの生徒が所有している。

スマホ、パソコンなどを含めたインターネットの平均利用時間は、小学生93分、中学生138分、高校生207分と、これも年齢が上がるにつれ増えている。高校生の20%が「5時間以上」と回答。これでは自ら犯罪に巻き込まれるようなものだ。

利用に関して「ルールを決めている」という保護者が80%なのに対して、子どもの方は65%とギャップがある。高校生にいたっては保護者70%に対して子どもが51%とその差は大きい。スマホやパソコンは、今やなくてはならないツールだが、犯罪被害のほか依存症やいじめといった問題の温床にもなっている。家庭でいま一度、話し合う機会を持ってほしい。

河北抄

河北新報 2017年5月18日

「僕は、いじめられていました」そんな書き出しの手紙が仙台市の社会人応援団「青空応援団」に届いた。差出人の高校生は物を投げられたり、階段で後ろから蹴られたり。中学で執拗（しつよう）ないじめに遭ったと打ち明ける。心臓が少しのことでバクバクし、何を食べても味なんかしない。死にたいと思い始めたころ、青空応援団を知ったという。「俺たちは『生きる』という選択を応援します。君にはね、応援団がいるよ」。団長の平了さん（39）のブログに勇気づけられ、メールを送ったら返信があった。「君に最強の魔法を教えよう。『関わった全員の名前、遺書に書いて死んでやるから覚悟しろ』と言ってみな。一瞬でバクバクがドキドキに変わった。「魔法」を試した彼。いじめはやみ、「オドオドしてるのは彼らの方」になった。「僕は今、生きています。団長の応援があったから」と手紙は結ぶ。ひきょうな奴（やつ）は許さない。自死も絶対認めない。団長のエールは強く温かい。「誰も君を応援しなくとも、俺たちがいる。俺は、君の傘になる。ガンバレ」

河北春秋

河北新報 2017年5月25日

精神科医の蟻塚亮二さん（70）は、相馬市にある「メンタルクリニックなごみ」院長。東日本大震災、東京電力福島第1原発事故で心に傷を負った被災者を4年前から診療する。「トラウマ（心的外傷）は雪だるまのように膨らむのです」と語る▼トラウマとは衝撃的な出来事から受けた心の傷で、記憶のぶり返し、不眠、うつなどの心身症状を訴える人が多い。小さい時に家族の失跡を経験し、震災での避難を引き金に自傷に陥った人もいるそう▼「言葉で自らを表現しにくい子どもは心の傷を気付かれないまま、新たな傷を重ねやすい」。自分の存在や望みを失わせるような打撃が加われば、膨らんだ心の傷は破れてしまうと蟻塚さん▼仙台市折立中2年生が先月、いじめの被害を訴え自殺した問題。報道から浮かぶのは生徒の苦しみの歳月だ。「臭い」「きたない」と校内で悪口を言われ、教師から頭をたたかれたり、口に粘着テープを貼られたりしたという。小学生の時にも教師から工作を壊され、暴言を吐かれたと遺族が明かした▼いじめの実態を調べる第三者委員会を同市教委が設ける意向だ。この3年で3人目となる市立中学生の悲劇。もはや曖昧な調査で信頼回復は難しい。生徒の心の傷の一つ一つに厳しく向き合わなくては。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行